

【日本の大学】第 65 回——鳥取大学：知と実践を融合し社会に貢献

鳥取大学は、本州南部の日本海側にある鳥取県の県庁所在地（鳥取市）に本部を置く中堅の国立大学である。1949 年に二つの師範学校と鳥取農林専門学校、米子医科大学を統合して設立された。スタートは学芸学部、医学部、農学部の 3 学部だった。

前身校の時代から、地域の課題を地域の人々とともに考えて解決し、その過程で得られた知見を普遍化して広く国内外に発信し、科学の発展や世界の平和や福祉に貢献することを目指してきた。大学は基本理念として、こうした伝統を受け継いで実践を通して知識を深め理論を身につけ、地域から国際社会まで広く社会に貢献する「知と実践の融合」を謳っている。現在は地域学部、医学部、工学部、農学部の 4 学部と、修士・博士課程の大学院などを保有する総合大学となっている。



大学正門の前での記念撮影

旧兵舎を校舎に活用

以下、鳥取大学のホームページを中心に、大学の歩みと現状をみていこう。

1949 年 7 月、鳥取市立川町の旧 47 部隊兵舎で第 1 回の入学式が開かれた。校舎も、1950 年 8 月には、学芸学部が鳥取師範学校校舎から立川町の旧鳥取連隊跡に移転して旧兵舎を校舎として改造して使用。大学の本部も 1952 年に同所に移転するなど、戦前の兵舎跡地を

活用していた。

学芸学部の源流は1874年に設置された小学教員伝習所である。同伝習所が鳥取師範学校へつながり、もう一つの流れである鳥取青年師範学校とともに大学設立で学芸学部となった。学部には4年制（第一種）の中学校教員養成課程、小学校教員養成課程と、2年制（第二種）の中学校教員養成課程、小学校教員養成課程と小学校教員臨時養成科が置かれた。

農学部は1920年に設置された鳥取高等農業学校の流れをくむ鳥取農林専門学校から引き継がれた。建物も鳥取市吉方の鳥取農林専門学校の建物をそのまま使用し、農学科、農芸化学科、獣医畜産学科、林学科の4学科が置かれ、附属農場、附属演習林が設けられた。

医学部は1945年設立の米子医学専門学校を前身とする米子医科大学が鳥取大学設立の際に包括されて誕生した。医学部も前身の専門学校の建物をそのまま使用していた。1958年には大学院医学研究科（博士課程）が設置されて17名が入学している。

1960年代になって、日本経済が高度成長期に入るに伴い、大学でも学部や学科の新・増設が実現した。1965年には4番目の学部として工学部が誕生。工学部は当初、機械工学科、電気工学科の2学科だったが、66年に工業化学科、67年に土木工学科が加わった。

旧制の専門学校の建物や兵舎跡を使用していた各学部は、土地建物を一カ所に集約する整備計画を進め、1966年に現在でもキャンパスがある鳥取地区（鳥取市湖山町）への統合移転が実現した。移転を前に学芸学部は教育学部へと名称を変更している。

1970年代にも学部学科の新・増設が続いた。72年には工学部に生産機械工学科が増設され、74年には大学院工学研究科（修士課程）を設置、75年には資源循環化学科も開設されている。



キャンパス風景

地域学部へ転換

教育学部はその後、1999年に教育地域科学部に改組され、教員養成とともに文系の人材を取り込んだ新しい構想の学部となった。2000年代に入ると、地域との連携や共同研究が重視される時期となり、地域共同研究センターを基盤とした共同研究推進機構の設置（2000年）、医学系研究科に機能再生医科学専攻の設置（2003年）、アドミッションセンター、大学教育総合センター、国際交流センターなどの教育・研究施設が次々に開設された。

一方、2004年に、全国の国立大学が独立行政法人化される中で、鳥取大学も国立大学法人鳥取大学となるとともに、隣の島根大学との間で、全国で初めて県境を越えた教員養成学生定員を移動し、教育地域科学部は地域学部へと転換が図られた。学部の付属であった附属幼稚園、小中学校などは大学の付属となった。

地域学部（地域学科）はそのコンセプトとして以下の4点を掲げている。即ち、（1）地域をつくり上げている諸要素（社会・文化・自然）に関する幅広い知識を修得し、それらを相互に関連付けて理解する高度な思考力を養成する（2）地域にある様々な公共的課題を探究するために必要な知的好奇心を養う（3）批判的判断力、創造的表現力、コミュニケーション力を発揮して、地域社会の課題解決にたずさわる実践力を磨く（4）最終的に、高い倫理

観と責任感をもって地域社会の再生・持続的発展に貢献できる人材の養成を目指す——
としている。



地域学部

2017年度には地域学科の中に3コースを設けた。地域創造、人間形成、国際地域文化の三つで、地域の諸課題に対してより学際的、総合的にアプローチできる態勢とした。

「地域創造コース」は、地域の現在および将来の課題に対して、自治体、地域に密着した民間企業、NPO、各種の活動団体やコミュニティなどにおいて、「地域創造」に積極的かつ主体的に取り組むキーパーソンとなる人材育成を目指す。

「人間形成コース」は、人間形成に関わる諸理論を学び、学校教育を含む地域と教育の関係を再構築し、地域の人づくりを支えるキーパーソンとなる人材を養成する。小学校、幼稚園、特別支援学校の教員免許と保育士資格の取得が可能である。

「国際地域文化コース」は、様々な文化の関係を理解し、日本や世界の様々な地域で、異質なものを相互に認め合いながら、「つながりの創出」「一人ひとりの生活と生の充実」を実現するために求められる知識や技能、言語能力や現地感覚・現場感覚を身につけた人材の養成を目指している。学部には、「子どもの発達・学習研究センター」と「芸術文化センター」

という二つの研究センターがある。

岐阜大と共同獣医学科

農学部は4学科で発足したあと、組織の増設や改組が実施された。総合農学科の増設(1953年)、農業工学科の増設(62年)、大学院農学研究科(修士課程)の設置(67年)があり、1987年には、それまでの農林学系の5学科を統合して農林総合科学科に改組した。また、1989年には、近隣の島根大学、山口大学とともに大学院の連合農学研究科博士課程を設置している。1999年には農林総合科学科を改組して生物資源環境学科にしたあと、2017年には生命環境農学科となった。生命環境農学科は現在、国際乾燥地農学コース、里地里山環境管理学コース、植物菌類生産科学コース、農芸化学コースの四つの教育コースからなっている。また、獣医学科は、2004年に研究分野の増設を行った後、2013年には岐阜大学と共同で共同獣医学科(4講座)となっている。



農学部里山生態実習

医学部は医学科だけだったが、1990年に生命科学科が増設(入学定員40名)された。また、1975年に看護・臨床検査の専門知識などを学ぶために併設していた医療技術短期大学部を改組して、1999年に保健学科を設置した。現在、各学科の定員は医学科が653名、生命科学科が160名、保健学科の看護学専攻が322名、検査技術科学専攻が160名(いずれも2021年4月現在)となっている。



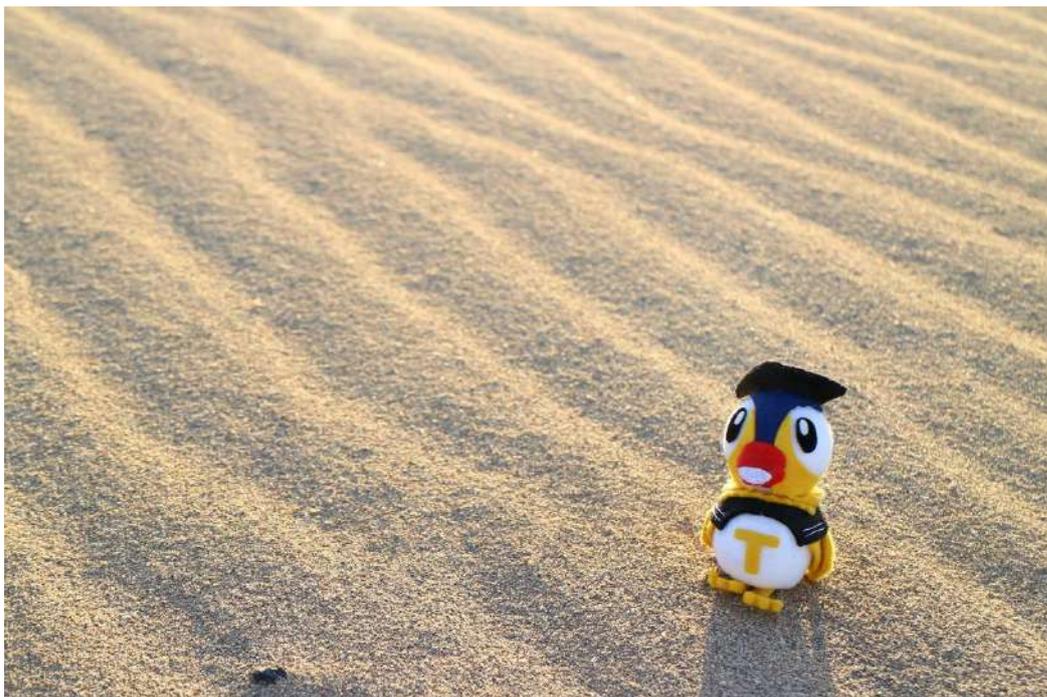
医学部

工学部の学科拡大は 1980 年代以降も続き、80 年海洋土木工学科、85 年社会開発システム工学科が設置された。1989 年には既存の 9 学科を 7 学科にまとめた大講座制を採用した。さらに 2015 年には「機械物理系学科」「電気情報系学科」「化学バイオ系学科」「社会システム土木系学科」の 4 学科に集約・改組が実施された。各学科もそれぞれいくつかのプログラムに分かれており、例えば、機械物理系学科では「機械工学」「航空宇宙工学」「ロボティクス」「物理工学」の四つのプログラムからなっている。学部生は全員 2 年次から始まる教育プログラムの選択に向けて「全学共通科目」と「学科共通科目」を履修。専門分野の基礎となる数学、物理、化学、情報処理などの知識と、プログラムを見据えた学科横断的な基礎知識を学ぶ。2 年次以降は、プログラム別の選択必修科目のほか、自身のキャリアパスを考えながら高度専門科目や分野融合科目などの多くの選択科目から自由に履修していく。

大学の中で特色のある組織としては乾燥地研究センターが挙げられる。地域に広大な海岸砂丘（鳥取砂丘）があり、ここを足掛かりに大学では乾燥地の研究を進めてきた。センターは砂丘の西側にあり、元々は農学部附属の砂丘利用研究施設だった。砂丘研究で得た知識と技術を国際的な問題に応用しようと 1990 年に乾燥地研究センターに改名、乾燥地科学研究の全国の拠点となっている。また、乾燥地や開発途上国に関する教育・研究を大学全体として展開するため、国際乾燥地研究教育機構を 2015 年に設置している。

大学の国際化が進んだのは、1990 年代である。外国人留学生や研究者が大幅に増加し、

多くの大学と学術交流協定が締結された。94年には国際交流会館が建設されている。「沙漠化防止」を国際戦略の一つに位置付けており、「国際戦略企画本部」を設置するなど、活動を活発化させている。乾燥地域において沙漠化防止研究に関わり、学術交流協定校に教育研究拠点（メキシコ、エジプトと中国3か所）を置いている。これらの地域を中心に外国人留学生は146名に上っている。外国人留学生に対する日本語・日本事情教育、生活支援、学生・教職員の国際活動へ支援や情報提供などを担っているのが国際交流センターである。



鳥取砂丘と鳥取大学キャラクターとりりん

学部学生は4学部合わせて5120名、大学院修士課程が674名、博士課程が354名である。また、教授、準教授など教育職員は798名。(以上2022年5月現在)

学長は、中島廣光氏である。東京大学大学院博士課程修了、1981年鳥取大学農学部助手、89年助教授、99年教授、2005年副学部長、07年学部長。2013年鳥取大学理事・副学長、2019年から現職。専門は、植物病原菌産毒素の化学構造と生合成、微生物代謝産物の農業への応用など。

日文：滝川 進
写真：鳥取大学 HP&FaceBook